

発行所

札幌市北区北15条西7丁目
北大医学部同窓会
TEL&FAX (011) 706-5007
E-mail: furate@med.hokudai.ac.jp
http://www.med.hokudai.ac.jp/~alum-w/

編集人 田中 伸哉
発行人 浅香 正博

北大医学部同窓会新聞



CONTENTS

- (1) ・東京フラテ会便り……………松谷有希雄

- (2) ・新たな神奈川フラテ会の活動
……………仁保 正和
・先生ご無沙汰しています…菅野 盛夫

- (3) ・先生ご無沙汰しています…阿部 和厚
・新世紀の医学に向けて(25)
……………白土 博樹

- (4) ・海外で活躍する同窓生……伊藤 沙和
・第53回医学展について……亀野 力哉

- (5) ・フラテ祭2014開催報告
・北大医学部創設100周年に向けて
思い出の写真
・北大医学部創設100周年の
ロゴマーク決定

- (6) ・平成26年度
フラテ研究奨励賞受賞候補者の募集!!
・ご寄付の報告
・同窓会費について
・同窓会新聞原稿の募集について
・平成26年度
同窓会員名簿記載事項について

- (7) ・ドクター総合補償制度について
・告知板
・北海道医学会からお知らせ
・フラテ101号発行のお知らせ

- (8) ・新刊書紹介 ・ご逝去者
・一面の写真説明 ・編集後記



「新しい動物実験施設」

有川 二郎(会員2)



東京フラテ会便り

東京フラテ会 会長(国立保健医療科学院長) 松谷 有希雄(51期)

東京フラテ会は、関東・甲・信・越・静の11都県に在住又は勤務している北大医学部(医専を含む)出身者の同窓会です。もっとも、明文の規約などはなく、年会費もないので、厳密な会員制をとっているわけではありません。従って、会の集まりには地域を問わず、石川県や福島県などからの参加者もいます。

主な活動として、毎年3月中・下旬の土曜日の夕に、上京した北大の医学生を歓迎して会員が集い、講演会、総会、懇親会を神田錦町の学生会館(旧帝国大学の同窓会館)で行っています。懇親会終了後は、向かいの如水会館(一橋大学の同窓会館)に移って2次会となるのが慣例で、学生との交歓も深まります。卒業後、北海道を離れ、勤務、開業している同窓の情報交換と憩いの場として長年続けてきた集まりです。

会には、現在、顧問2名と会長、副会長3名、幹事長、常任幹事12名、事務局長及び監事2名がおり、年に数回幹事会を開催して企画、運営に当たっております。

今回は、平成27年3月14日(土)に、恒例の学生会館にて、講師に阪大名誉教授の谷口直之先生(43期)をお迎えして開かれる予定です。谷口先生は、糖鎖の

研究で平成23年に日本学士院賞を受賞されています。多くの同窓、学生の参加を期待しています。

関東圏には多くの病院、大学、研究所等があり、そこで診療、教育、研究の各方面に活躍されているフラテ会員が多数います。また、医師会や国・自治体で活動されている方もいます。毎年の講演会には、これらの同窓に講師をお願いして最新の医学・医療に関する情報を伺っています。最近では、慈恵医大内科の田尻久雄教授、国立感染症研究所感染病理部の長谷川秀樹部長、東大医学部微生物学講座の畠山昌則教授、日本医師会副会長の寶住興一先生、東京女子医大生化学教室の高桑雄一教授にそれぞれご出講いただきました。私も、厚生労働省在任中にお話ししたことがあります。

また、関東圏に限らず、今年3月には札幌から笠原正典医学研究科長・医学部長にお越しいただきました。医学部以外では法学部出身で作家の向井承子さんにご講演いただいたこともあります。

記録によると、第1回の東京フラテ会は、昭和5年3月に、秦勉造教授引率の学生衛生見学旅行団を歓迎して、お茶の水文化会館で開かれています。初めから今と同じスタイルとは驚きです。今から40

年前、私たちも、卒業1年前の春休みにフェリーと高速夜行バスを使って東京及び京都・大阪の病院、研究所などを巡りました。東京フラテ会、関西フラテ会の歓迎会が開かれ、東京では、北大東京同窓会のクラーク記念室で、1期の宮川知平先生が、大いに皆を激励されたことを覚えています。

宮川先生は、平成10年に亡くなられましたが、東京フラテ会はもちろんのこと、昭和17年に各学部同窓会の連合体として発足した北大東京同窓会の生みの親・育ての親でもあります。私を含め東京へ出てきた多くのフラテ会員が宮川先生のお世話になりました。先生は、昭和48年に、寄付を募って高田馬場の宮川病院の跡地に建つビルの一室をクラーク記念室としました。かつて東京フラテ会の幹事会もそこで開かれ、高田馬場まで足を運んだものです。その部屋は、平成19年に、東京駅日本橋口のサピアタワー10階にある北大東京オフィス内に同窓会事務所が移るまで使われました。

東京フラテ会の会長は、初代の宮川先生の後、10期の故五十嵐義明先生(元厚生省環境衛生局長)、28期の故榊孝悌先生(元同局長)、39期の柿田章先生(元北里大学病院長、元私立医科大学協会副

会長)と続き、平成24年度から51期の松谷が務めております。会の事務局は、柿田先生の頃から東大和病院や武蔵村山病院などを運営している社会医療法人財団大和会(高橋武宣会長42期、佐藤光史理事長46期)の先生方のお世話になっており、今は武蔵村山病院の鹿取正道先生(67期)が事務局長をしています。大和会には幹事会に参画されている先生も多く、言わば往時の宮川病院の役割を担っていただいております。会員一同感謝しております。

近年、学生の見学旅行に教官の引率がなくなり、卒業研修の状況や情報入手の環境が大きく変わってきたこともあり、3月に上京する学生が少なくなって来ました。むしろ、夏休み頃に研修病院の合同説明会などが催され、それらに参加する学生が増えているとのこと。このため、春の集まりとは別に、夏に上京した学生との交流会を、暑気払いを兼ねて企画し、先般、有志で試行したところです。折角上京した学生に、説明会などでは得られない情報を提供できればと考え、今後定例の行事とするか検討して行こうと思っております。

新たな神奈川フラテ会の活動 – “連携”と“絆”を探る

神奈川フラテ会世話人会

7月26日、平成26年度神奈川フラテ病診・診々連携の会（以下 神奈川フラテ会と略）総会が20名の参加を得て開催された。初めて医療用医薬品製造販売業公正取引協議会（以下公正取引協議会と略）の協賛を得たこと、そのために組織を変更したこと、北大の現役学生が参加したことなどは新たなフラテ会支部の活動といえるものだ。他支部の活動の参考にするために“連携”、“絆”と“公正取引協議会”についての神奈川フラテ会の取り組みを述べたい。

I) 神奈川フラテ会；神奈川フラテ会は60年の活動歴をもっている。初代会長を鶴島修男先生（2期）が務められた後2代会長を小西宏先生17、3代、関本信先生24、4代、朝倉茂夫先生37が継いでこられた。しかし時代の流れのため昨年からは会長制に代わり世話人会制とし、名称を神奈川フラテ病診・診々連携の会とすることになった。代表世話人を仁保43が務めている。世話人は別に掲げる。

当会の特徴のひとつである総会の時神奈川県内の同窓による学術講演会を併せて開催することは関本信会長の時から始められた。会は毎年開催され今年で17回を数える。会の大きな柱であるこの講演会は同窓の活躍と最新の知識を1時間の講演から知ることができる貴重な機会だ。なおII) で述べるように名称・他の変更はこの講演会開催を続けるために必

要なことだった。一方演者の選定は世話人の豊富な情報を基にしてなされるので講演は時宜を得たものになる。

今年から試みられた北大の現役学生を招待する新たな企画は医学部と薬学部の現役学生、各1名の参加という形で実現した。彼らにとって県内の医療機関関係者が参加する当会で直接顔を合わせて話を聞くことは将来の進路を選ぶ時参考になることだ。また今年の講演、横浜市立市民病院緩和ケア内科部長 国兼浩嗣先生58の「この20年の間に“緩和ケア”はどう変わったか」と理化学研究所システム糖鎖生物学研究グループディレクター

谷口直之先生43の「理化学研究所の生命科学研究に従事して」は何れも大学では聴くことができない内容のものだっただろう。しかし医療の分野に進む人は知っておかなければならないことなので彼らの財産になったと思う。

川上正也先生29の若々しい乾杯の音頭、「青春の地、札幌」のことばで始まった懇親会では川上正也先生と露木重明先生34が学生とOBに向けて「自信をもつこと」を話されたがこれは当会の目的のひとつだ。なごやかに親睦を深める会だったが先輩が後輩を激励し奮起を願う会にもなった。最後に国兼浩嗣先生の美声の前口上で“都ぞ弥生”を斉唱し散会したが、参加者全員が日頃のストレスを解消し明日からの診療、研究への活力

を得ることができた会だったという感想をもたせよう。埼玉県在住の伊藤敦之先生43と谷口直之先生が雰囲気よさを理由として入会してくださったことはそれを表している。後日参加した学生から来年も是非参加したいということばも聞いた。

現在の県内在住の同窓は200名を越える。しかし縦と横の“連携”はいまひとつの状態だ。特に縦の“連携”を強化することはこころの支え、“絆”をもつことになるので、「自信」をもって診療あるいは研究に従事するために必要なことだろう。当会はこれから学生の清々しさを加えた一層雰囲気のよい会になると思うので是非同窓の参加を願いたい。

II) “公正取引協議会”と製薬業界の協賛；製薬業界の協賛は一社からは得ることはできない情勢になったが、医師と製薬業界の両者の公正取引の下では複数の会社から少額ずつを得ることは可能だ。この協賛金は全てが神奈川フラテ会総会の学術講演会費用（講師への謝礼と学生の旅費）に充てられ、それは税理士が作成した会計報告書に掲げられる。

一方協賛を得るためには同窓会などの特定の医師の会ではないことを示すために名称を神奈川フラテ病診・診々連携の会とし、会計が公正なものであることを示すために税理士が書類を作成し、独立した会であることを示すために口座を開

設し、会員が名目だけのものでないことを示すために入会金を徴収することなどの条件を整える必要があった。

公正取引協議会に提出する時必要な書類は会則、名簿、趣意書、プログラム、寄付募集要項、寄付申込書、収支計算書などだ。

当会の依頼は公正取引協議会にとって初めてのものだった。そのため書類は3回の訂正の後関東での担当部署である南関東支部の連絡Gの審査を通り協賛を得ることができた。なおこれらの書類は今後はそれぞれの数字を書き改めるだけで毎年の審査を通るといふ。

- III) 世話人；
- (代 表) 仁保正和43
 - (副代表) 武宮省治43 市川靖史62
 - (世話人) 国兼浩嗣58 田中 潔60
 - 力石辰也60 折館伸彦64
 - 古屋充子67 前田 慎69
- フラテ会出席者；
- 川上正也 露木重明 伊藤敦之
 - 武宮省治 谷口直之 仁保正和
 - 杉本浩太郎47 国兼浩嗣 田中潔
 - 力石辰也 市川靖史 大塚吾郎62
 - 廣瀬直人64 麻薙美香65 古屋充子
 - 中馬誠69 前田慎
- (学 生) 笠井由紀子 笠井悠太郎
- (税理士) 小関恭子

(文責 仁保正和)

先生ご無沙汰しています

名誉教授 菅野 盛夫 (38期)



一市井の人として世の中の片隅で、ひっそりと過ごして14年経ちました。それなりの「喜・怒・哀・楽」を人並みに味わいながら、取り立てて申し上げることもなく平凡に暮らしております。

同窓会編集部から原稿依頼のお手紙を受け取り、はて、如何したものかと数日の間、机上に放っておいたのですが、その昔、同窓会理事として同窓会新聞編集部のご苦勞を見ておりましたので、無下にお断りもできないだろうと、この拙文をまとめることとしました。私が、些事はありましたがそれなりに生きている（生かされている？）レポートです。

現役時代（1976～2000）は、右肩上がりの日本経済の発展の恩恵を受けて、恵まれた環境で研究に専念出来たことを、今も感謝しております。それには、新設講座への温かい医学部のご支援、学外からのご助力、加えて研究室の立ち上げに昼夜を惜しまず協力してくれた研究仲間が存在がありました。その頃の仲間たちや、その後研究に加わった方々が、時を経て、それぞれ「場」を得て活躍されていることを仄聞するのも、私のささやかな喜びです。

退官後、養護教員養成短大や医療系

専門学校で、基礎医学、基礎臨床医学の授業を担当して今に至っております。知らなかったことですが（大学の先生は世間知らず、いうなれば、専門バカと指弾されていますが、常識家と自負していた私とてその類から外れるものではありませんでした）、これらのパラメディカル養成学校では、教育担当者に医師資格を必要とする科目があり、その教員確保に苦勞されているとのことでした。というわけで、教える対象は変わりましたが、医療の重要なメンバーの養成に今も関わっております。しかしながら、この14年の教育経験は私にとって医学部における24年間の教育経験を完全にひっくり返すものでした。医学部学生への教育は、全科目必須で積み上げ方式であること、多くの優れた参考書がそろっていたこと

（私たちの学生時代に比べ羨ましいことであった）、学生の素質が優秀であったこと、などから気楽に講義していたような気がします（むしろ、安易にと言ひ換えた方がいいかもしれない）。しかし、その後の14年間で思い知ったのは、「教える」ことの難しさです。医療に、チームメンバーの一人一人が最高の技術を発揮すること

が求められる現在の状況にあって、そのメンバーの教育に携わる者の責任は極めて重いと云わざるを得ません。医学教育に従事した時間を含めて、教育をなごりにしてきたことを反省しております。基礎医学の授業を通して、将来医療を支えてくれるパラメディカルの若者たちが、それぞれの「生命観」をもって病む人に接することができるように、ささやかですがお役に立ちたいと思っております。

年を取ると避けられないのが健康障害です。高齢者の多くが望むのは「健康でいること」で、厚労省も、最近、健康寿命を重要視するようになってきました。私は、どちらかといえば、積極的に健康増進を図るよりは、貝原益軒流に「養生」を重んじて、それなりに健康を維持してきましたが、先日、緑膿菌による肺炎で4ヵ月入院生活を余儀なくされました。ICUにも1ヵ月入り、日ごろ冗談にいていた「片足（両足？）を棺桶に突っ込んでいます」状態を体験しましたが、その間に同窓の医師の方々に助けられ、また、看護師、臨床工学技士の諸氏のお世話になって、生かされることとなりました。特に、パラメディカルの方々の貢

献を目の当たりにして、教えることの責任をあらためて痛感し、反省もいたしました。

入院中に昔馴染みの薬と再会する経験をしました。その一つは、「ワソラン（一般名ベラパミル）」です。古い薬ですが、カルシウム拮抗薬の先駆けになった薬で、私が薬理の大学院に入った時に、教授に言われて調べた新規化合物です。ガマ心臓を使って、ベラパミルがアドレナリンの陽性変時作用と陽性変力作用を抑制することを確認したのですが、もちろんカルシウムチャンネルの遮断作用まで考えは至らなかったのです。「ワソラン」による心房細動発作からの解放は、懐かしさを伴った感謝でした。もう一つは、心筋虚血が疑われたので冠拡張薬として投与されたニコランジルです。日本発のKチャンネル開口薬で研究によく使っておりました。生きるか、死ぬかの厳しい状況でしたが、昔の研究生活を思い出す薬物とも出会えた貴重な体験でした。

さて今後ですが、健康が許す限り、未来の医療を支える若者たちのお役に立てればとそれなりに努めていく所存です。

先生ご無沙汰しています



名誉教授 阿部 和厚(40期)

みなさま、こんにちは。ご無沙汰しております。

私は、2002年3月に北大を定年退職し、4月からあいの里の専門学校から新設されたばかりの北海道医療大学心理科学部で言語聴覚士養成の言語聴覚療法学科に就任。広重 力学長（もと医学部生理学教授・北大学長）に辞令をいただき、臨床心理学との2学科の学部で、8年間、教鞭をとりました。

言語聴覚士養成大学は、歴史も浅く、全国で10校なく、すべて私立大学。卒業時に国家試験がありますが、教育システムは全国的にまだ未熟。これは、面白いとやる気になり、最初の授業で、この学科を日本で一番の言語聴覚士養成大学にすると宣言。そのため大変な8年となりました。

一年生前期の「医学総論」を両学科別々に手慣れたグループ学習方式学生参加型授業。大学では実習のない理科教育はありえないと「解剖学」は、机作りつけの対面授業で計画されていた教室を机移動式、教室のうしろに流しとして、最低限の実習もできる教室にして授業。また、一年生と机をならべて「音声学」の授業を聴講。卒論や修論の研究の基としました。

うれしいことに2年目から同期の田代邦雄くん（もと北大神経内科教授）が

加わりました。そして、まだ、コアカリキュラム（コアカリ）がないなか、学科教員をいれて申請した「言語聴覚士養成コアカリの作成」の科研費2年をえて、年3回のOSCEを開始。まとめたコアカリとOSCEマニュアルは、全国の言語聴覚士養成大学、専門学校に配布。カリキュラムを改め、最終学年には、PBL方式の模擬臨床実習。すべて全国初でした。このなかで、入学時の学力が問題で、参加型導入授業「人間科学入門」、「医療コミュニケーション」など新しい科目を実施。そして、国家試験準備授業も行い、1期生の言語聴覚士国家試験合格率は全国一。その間、私は学科長、学部長をつとめました。

学部教育のあとには大学院教育。全国初の言語聴覚士大学院修士課程、博士課程を設立しました。

私は、北大で大学の教育改革を先導してきたこともあって、大学の教育を評価する大学基準協会で退職後まで起用され、文部科学省「特色GP」「推進GP」「教育GP」審査員を長く務めてきました。そのため、医療大学ではGP申請アドバイザーとなり、直接申請した2件は採択。そのひとつは3年間の「大学院における言語聴覚士卒業臨床研修プログラム」でした。その他もいれ総計でいうと2億近い予算を獲得。たが、予

算にみあう仕事が大変でした。

医療大学全体では、最初からFD委員会をまかされ、泊まりこみFD実施。松田一郎学長（もと北大小児科・熊本大教授）になって、大学教育センター設立にかかわり、最初のセンター長となりました。そこで、教養教育カリキュラム改革。また、札幌医大との連携授業「メディカルカフェをつくる」の授業設計、リーダーをつとめ、最後の学生参加型授業となりました。そして、2010年3月で退職。医療大学では、毎年2名に与えられる功労賞を2回受賞。在職8年で異例の名誉教授の称号も与えられました。

退職後、大学中心の生活から開放されましたが、しばらくは北大の高等教育開発機構の研究員を務め、2012年には大学教育学会の実行委員長も担当。これまで教育改革の指導に招かれた百近い大学のうち、山形大学でいままも連係FDの諮問委員です。

毎日が日曜のような生活ですが、結構、忙しいです。年に数冊の人体関係の一般向け、子供向け図鑑、解説書、まんが本などの監修があり、かなりの冊数になっています。「いちばんわかりやすい解剖学」という一般向けの本も出版。また、教科書「組織学」の改訂の準備。オールカラー化ということ

で、500以上ある図のすべてを1年かけて、フォトショップとイラストレーターでカラー化。この一部は、ある展覧会で展示。ミクロのアート、サイエンスはアートと評されました。

ときどきクラシックギターと口琴でライブをしています。口琴は、2011年にサハ共和国での世界口琴大会へ参加。サハは世界一の口琴の国で、以前から交友のあったサハのトップ演奏家たちから招かれ、口琴の音の音響解析について発表、演奏にも参加しました。

また、モエレ沼のガラスのピラミッドで3回、小樽の能楽堂、札幌市資料館、白老の仙人の森での演奏会、ライブカフェでのライブ、富良野の演劇工場、札幌MIXホールでの朗読への音楽などが目立ったもの。ピアノ中心のアンビエント音楽とのギターや口琴でのセッションもあり、最近、外国からCDを3枚ほど。好評です。また、口琴では、かなりの回数講演もあり、大谷大学でムックリの製作と演奏の指導をしています。

町内では、児童会館で小学生に月に一度ボランティアで理科教室。町内会の仕事も結構あります。また、ほとんど毎朝、6時ごろから1時間ほど自転車に乗っています。

では、みなさん、ごきげんよう。

新世紀の医学に向けて (25)

国際連携研究教育局(GI-CoRE)量子医理工学グローバルステーションについて



白土 博樹(57期)

我が家の雑草系庭場兼駐車場では、カタバミが夏の日光に花卉を開き、セイヨウミヤコグサの花々と鮮やかな黄色を共演している。しかし、夜になると、雑草に隠れるコオロギの音が、網戸を介して涼やかに聞こえ始めている。5年間の最先端研究開発支援プログラムを終え、最先端研究支援室のメンバーが解散し、少しさびしいながら、ホッとしている自分がある。いままで気が付かなかったが、5年間、かなり気を張って生きてきたようだ。このあたりで静かな隠遁生活に入ることができれば個人的にはありがたいのであるが、現実にはそうはいきそうにない。大型の国費を使わせて頂き、やっと出来上がった陽子線治療センターで、世界最先端の臨床研究や新たな開発や生物実験を始めるべき立場にいる。

北海道大学病院での臨床試験は、3月19日に患者治療を開始し、8月1日から先進医療を開始し、北大が世界を牽引すべき動物追跡装置も8月14日に薬事承認され、放射線治療医や医学物理士や線量測定士の活躍で、順調に推移している。

一方、世界的に通用する臨床研究、新たな治療技術の開発、陽子線ならで

はの生物実験に関しては、本学だけの力では世界に対抗するのが難しい時代に入ってきている。そこで、かつてから友好関係にあり、本学の動物追跡陽子線治療に大きな興味を示していたStanford大学の放射線腫瘍学講座との連携をすることを、昨年春から考えてきていた。幸い、時を同じくして、北海道大学では、大学のグローバル化・大学ランキングの上昇を目指すうえで、世界的な著名大学との強力な連携を推進することを考えていた。聞けば、本学とStanford大学とが今までにない強力な連携でグローバルな研究と教育を行うためであれば、その構想を総長直下に新たに設置する国際連携研究教育局(Global Institution for Collaborative Research and Education, GI-CoRE)の重要な事業として支援したいというご提案を頂いた。我々の医理工学連携研究教育を中心とし、量子医理工学グローバルステーションを設置し、もうひとつ獣医学研究科がメルボルン大学等と進める人獣感染症グローバルステーションとともに、GI-CoREを形成。外国人の札幌での生活や研究を支援するため、国際本部にGI-CoRE事務部を置き、

英語に堪能な事務員が、海外大学とのやり取りを全面的にサポートしていくという。

大学が同構想を文科省に提案すると、初期設備費とStanford大学からの教員の人件費への支援が得られることとなった。本年4月1日から、小生が量子医理工学ステーション長となり、工学研究院から梅垣菊男教授が参加したほか、陽子線治療センターで活躍する清水伸一准教授以下が参加することとなった。この北大ユニットとともに、Stanford大学からは4名の教授が1年間に合わせて3月程度、Ruijian Li助教が6月程度常勤で北大にて教育研究に携わることとなり、Stanfordユニットが形成された。何度もSkype会議を行い、詳細を話合うとともに、実際的な研究をスタートさせた。まず、①放射線腫瘍学的な国際共同臨床研究の準備を病院で進めている。また、②工学研究院と共同で医学物理学的な共同研究を始めるとともに、8月18-22日に医学物理学のサマースクールを共同で開催し、北大医学研究科・工学院の学生に加え、ベトナムや東北大・京大・大阪の施設などから参加者があり、好評を博した。

そして、③医学研究科連携研究センターの連携分野として陽子線治療学分野を設置し、Stanford大学との連携で最先端の放射線生物学の研究を始めるべく、医学研究科の中棟4階で細胞実験室の準備が始まっている。今後、他学院との連携も予定されている。

大学の本来あるべき姿としては、古今東西、研究上の自由を謳歌し、世情と離れた静かな研究生活が相応しいはずで、注意をしないと国策に振り回される。その点では、私学で、世界トップ5を維持しているStanford大学との連携は、非常に楽しい。これらの活動が将来実を結び、本学が開学当初からのフロンティア精神やパンカラさを取り戻し、わが国発の国際的研究が、歴史を変えていくことを想像すると、ちょっとだけ胸が高鳴る。

我が家の近くには発寒川沿いのジョギングコースがあり、週末にゆっくり走ったり歩いたりしている。実は、ここはバードウォッチングの聖地でもある。カルガモの親子や川岸のアオサギを横目に、大きな青空を見上げ、澄み切った空気を思いっきり吸える北海道の良さを、心からかみしめている。

「海外で活躍する同窓生」 「Bench to Bedside & Back: Physician Scientistへの道」

Staff Clinician
Hematology Branch, National Heart, Lung, and Blood Institute
National Institutes of Health United States

伊藤 沙和(78期)



メリーランド州Bethesdaの街から地下鉄で一駅のところ米国国立衛生研究所(National Institutes of Health)の本部がある。ここは世界で最も規模の大きい生命医学研究機関であり、米国癌研究所(National Cancer Institute)をはじめとした27の研究所から成り立っている。日本版NIHという言葉がささやかに新聞を賑わせたことで、以前よりも日本での認知度は高まったかもしれないが、この広大なキャンパスに、病院(Clinical Research Center)があることはあまり知られていないかもしれない。病床数は240床と一見小規模だが、他の大学や研究機関と異なり唯一無二の存在である理由は、この病院が臨床研究に特化していることである。ここで診断や治療を受ける患者はもれなく臨床研究に参加していることが前提であり、現在約1500の臨床研究が進行中である。臨床研究といっても多種多様のプロトコルが存在しており、その約半数は稀少疾患の観察研究、残りの半数は臨床治験であり、その90%以上が第一相、第二相試験と称されるごく初期段階の治験で構成されている。私

は約5年前にこの場所でClinical Fellowとして血液腫瘍内科の領域においてTranslational Researchのトレーニングを始めた。Translational Researchとは、日本語で言うと探索的医療と呼ばれているようだが、Bench to Bedside & Backという言葉で象徴されるように、実験室から生まれた知見の臨床への応用、そして臨床からのフィードバックを基本とした、ヒトを対象にした研究である。医学の歴史を見れば、ごく当たり前のことのように思えるが、裏を返せば、生命医療科学があまりに細分化されてしまったおかげで Translational Researchという言葉を使う必要が出てきたのかもしれない。そして、そのリーダーシップをとるのがPhysician Scientistという役割だ。生命医療科学の専門的知識や臨床能力に加えて、臨床研究の立案、実行、解析する能力、そしてその研究が倫理的に妥当であるか社会に説明責任を果たさなければならない。Physician Scientistの育成に一定の研修方法があるわけではないが、NIHでは通年、臨床研究に関する知識や法令に関する講義がある。何よりも目の前の臨

床がすべて研究の一端であるという状況で、まさに体で臨床研究を経験していくというトレーニングを受けた。Clinical Fellowとして、臨床研究の立案、IRB (Institutional Review Board)での承認、FDA (US Food and Drug Administration)との交渉、実験室でのサンプル解析、論文作成と、目まぐるしい忙しさの中、多くのことを学んだ。現在は、Staff Clinicianとして骨髄移植に関わる3つの臨床治験を筆頭研究者として率いる傍ら、血液内科のコンサルト医の一員としてClinical Research Centerで起こる血液に関わる様々な疑問に答えている。また論文にも発表されていない遺伝子疾患に付随する血液病態を評価し、考察を加えていくことは専門医冥利につきるのかもしれないが、その分責任も大きい。またAcademic Researchにおける教育にも携わり始めたところだ。私がこのような進路を選択した原点は北大医学部時代に遡る。通常の講義や実習に加えて、上出利光教授から免疫学の最先端の研究の素晴らしさを、櫻井恒太郎教授から臨床研究の理論的な手解きを受け、秋田弘俊教

授から腫瘍内科とTranslational Researchの構想、そして田中伸哉教授からは癌科学の未来を教わった。その時に漠然と思いついていたのがPhysician Scientistという道であったのだと実感している。この誌面を通じて北大での教育に心から感謝申し上げたい。もちろんすべてが順風満帆な訳ではない。政府機関なので、政治経済状況に左右されることもある。昨年10月の米国政府機関閉鎖の際には、NIHも2週間以上その機能を停止せざる負えない状況になった。それでもなお、ここはPhysician Scientistにとってユートピアのような場所と言えるかもしれない。まだ将来のことは決めていないが、この恵まれた環境に奢ることなく、独立したPhysician Scientistを目指して、いつか医学生や若手の医師たちにこの道を進むことの幸せを伝えられる機会があればと願う。

“I am among those who think that science has great beauty. A scientist is not only a technician he is also a child placed before natural phenomena which impress him like a fairy tale” Marie Curie



第53回医学展について



医学展実行委員長

亀野 力哉
(第四学年)

本年度も6月7日(土)8日(日)に第53回医学展を開催致しました。日曜は生憎の雨天となりましたが、2日間合わせて約3000人にご来場いただくことができ、盛況のうちに終えることが出来ました。

医学展実行委員会では、今回のテーマとして「輪を広げよう」を掲げました。抽象的ではありますが、ひとの“輪”や知識・思索の“輪”、夢の“輪”を作

り、それを広げていくことができるような医学展の実施を目指した標語であります。来場者の方々へ向けたメッセージとしては、各企画への参加を通して健康増進に対する意識を向上させることや、学生や講演会講師とのふれあいにより、北海道大学医学部の教育・取り組みに興味を持っていただけるようにと願いが込められています。それと同時に、参加する学生に向けて、来場者の方々との交流によりコミュニケーション能力を向上させること、市民の方々に求められているものを考えること、学生同士の共同作業を通して将来医師や研究者として働く際に必須であるチームワークを学ぶことな

どを体験してほしいという意味も込められています。

我々が掲げたような理念は、表現こそ違えど、医学展の創始以来続いているものです。医学展の歴史は、昭和37年開催の第4回北大祭へ医学祭として参加したことに始まり、初回テーマは「大学と社会」でした。大学やその中で行われている教育・学問が、社会の評価や社会への還元によって初めて成り立ち得るという信念から、学校祭は学生のアイデンティティを確認できる数少ない機会であると考え、当時の医学科、薬学科、看護学校、X線技師学校とともにこの統一テーマを掲げたのです。

以来、第53回の今日に至るまで医学展が連続とその歴史を続けることが出来ているのも、学生時代参加した同窓生の皆様、各場面でご協力頂いた医学部関係者の皆様、並びにご協賛くださった法人・企業の皆様のご支援の賜物でございます。これからも、医学展が北大医学部を象徴する学生企画であり続けられるよう、今後ともご指導ご鞭撻を賜りますようお願い申し上げます。

なお、本年度より弊委員会の連絡先メールアドレスを変更致しました。北大医学展実行委員会への御意見などございましたら、下記までお願い致します。
office@hokudai-igakuten.org

フラテ祭2014開催報告

フラテ祭実行委員会事務局

去る9月27日(土)、本年度で第八回目となる「フラテ祭2014」は北海道大学ホームカミングデーと同日に開催いたしました。同窓生、教員、学生父母、関連企業、医療関係者の方々など延べ約110名が参加されました。

開催会場は2010年7月に完成した医学部学友会館「フラテ」(以降、フラテ会館)のホールと大研修室で、例年同様、多くの参加者にお越しいただけま

した。

第一部では、施設・キャンパスツアーを行いました。ツアーコースは「医学部施設巡り」、「キャンパス巡り」の2つ設け、多くの方々にご参加いただきました。

第二部の講演会では笠原正典医学部長が「北海道大学医学部・大学院医学研究科の目指すものー現況と展望ー」、松浦亨北海道大学病院長補佐が

「北大病院の過去と未来」、久保田健夫山梨大学大学院環境遺伝医学講座教授が「エピジェネティクスからみた近未来医療の展望」と題して講演されました。

その後、第十回目となる音羽博次奨学基金授与式が行われ、13名の学生に奨学基金が授与され、華やかなうちに式典が終了しました。

第三部のフラテ交歓会は、ホールに

て、吉岡充弘フラテ祭実行委員長の開会挨拶、北大男声合唱団による「都ぞ弥生」・「学友会歌」の合唱が披露されました。その後、場所を移して大研修室では、浅香正博同窓会会長の祝杯により開宴し、祝宴では学生による弦楽四重奏に耳を傾けながら和やかな雰囲気で行われました。また、現役学生による学生生活の紹介があり、父母の方々をはじめ、多くの方が興味深くご覧になっていました。そして、同窓生と北大男声合唱団が一体となり「都ぞ弥生」を合唱しました。最後には笠原正典医学部長による乾杯にて締め括られました。

多くの方のご支援とご協力をいただき今年も無事にフラテ祭を終えることができました。この場を借りて御礼申し上げます。



第3部 交歓会～浅香正博同窓会長による祝杯



第2部 特別講演～久保田健夫先生



第3部 学生による弦楽四重奏



音羽博次奨学基金授与式

北大医学部創設100周年に向けて 思い出の写真

耳鼻咽喉科平野新治第3代教授の旧蔵資料が北大図書館本館に資料として保存されています。今回その中から昭和30年代の懐かしい医学部、附属病院など学内風景3点をご紹介します。



医学部附属病院。右手は第2代の附属病院の病棟。左手は、初代の医局・病棟。



北13条の現在の銀杏並木。右手奥に第2代の外来病棟が見える。



初代の医局・病棟。手稲山を望む方向。左奥は建築中の工学部が見える。

北大医学部創設100周年のロゴマーク決定



2019年に北大医学部は創設100年を迎えます。激動する社会情勢の中、本学部は次世代に向かって、優秀な人材を輩出し続け、最先端の医学研究の成果を世界に発信し続け、医学・医療の中核となることが期待されています。同窓生、関係教員、関係者一同の結束を強固にして次の100年を目指すことを目的に、公認ロゴマークが決定しました。

現在の医学部の建物を中心に月桂樹が配置されています。色は青バック、白バックを基調として、形は、円形、正方形、長方形など様々なパターンが準備されています。

使用したい会員の皆様はどうぞ、北大医学部創立100周年記念準備室までご相談ください。

平成26年度 フラテ研究奨励賞受賞候補者の募集!!

平成26年度北海道大学医学部同窓会フラテ研究奨励賞受賞候補者を次のとおり募集します。

本賞は、医学部同窓会若手会員の創造的研究の育成に資することを目的に創設され、平成15年度の第1回から数えて昨年度までに43名の方々が受賞しています。

今年度は第12回目の募集となりますので、多くの若手会員が奮って応募されることを願っております。

1. 応募資格

平成26年度末(平成27年3月31日)現在、40歳未満である本会会員

2. 募集期間

平成26年12月1日から12月31日までの1ヵ月間(郵送の場合は、12月31日ま

での消印のあるものは有効とします。)

3. 申請書の提出方法等

(1)申請書及び関係書類を封筒に入れて同窓会事務局に持参、または郵送すること。

同窓会事務局は医学部管理棟2階です。

郵送先住所 〒060-8638

札幌市北区北15条西7丁目

北海道大学医学部内

北海道大学医学部同窓会事務局

(2)指導教授または関連施設長等の推薦書を申請書に添付すること。

(3)提出部数は各6部(コピー可)とします。なお、応募書類は返却いたしません。選考終了後に事務局で責任を持って破棄しますのでご了承ください。

(4)提出方法 封筒に「フラテ研究奨励賞応募書類在中」と朱書き、郵送する場合は必ず「簡易書留」としてください。

(5)申請書様式は、同窓会ホームページ: <http://www.med.hokudai.ac.jp/alum-w/> からダウンロードしてご使用ください。

4. 授賞件数、賞の内容等

(1)授賞件数 5名以内

(2)賞の内容 表彰盾及び研究奨励金 20万円を授与

5. 選考結果の発表

(1)受賞者が決定次第、北大医学部掲示板及び同窓会ホームページで発表するとともに、応募者には、選考結果をお知らせします。

(2)同窓会新聞で受賞者氏名、受賞対象の研究課題及び選考経緯等を報告します。

6. 授賞式

同窓会総会(平成27年2月9日(月)開催予定)において、授賞式を行います。

7. その他

(1)受賞者には、授賞式への出席及び同窓会新聞への寄稿をお願いしています。

(2)ご不明の点がありましたら、同窓会事務局にお問い合わせください。

Tel・Fax 011-706-5007

E-mail furate@med.hokudai.ac.jp

ご寄付の報告

同窓会事業支援のため、次の方々よりご寄付をいただきました。

平成26年 7月11日

48期 浅香正博様 金100,000円

平成26年 7月14日

会員(2) 長嶋和郎様 金100,000円

以上、ご報告申し上げます。誠に有難うございました。

同窓会では、企業、団体、個人の皆様に、同窓会事業支援のためのご寄付をお願いしております。寄付者のご了承をいただいた場合は、同窓会新聞で

紹介させていただきます。

10万円以上のご寄付には、楯または額による感謝状を贈呈させていただきます。

同窓会へのご寄付につきましては、同窓会事務局にご連絡ください。



同窓会費について

○会費納入のお願い

会員の皆様には平素より同窓会の運営に格別のご支援を賜り厚くお礼申し上げます。

ご承知のとおり同窓会の事業は会員の皆様の会費を原資として運営されています。

同窓会が行っている主な事業としては、同窓会新聞、会員名簿、同窓会誌の発行、新入生合宿研修、医学展、学生懇話会、卒業祝賀会など学友会への経費支援、同窓生、学生の父母などに参加していただくフラテ祭への経費支援、若手研究者の研究助成等多岐にわたっています。

これらの同窓会事業を一層充実・発展させるため、会費納入にご理解とご協力をお願い申し上げます。

○会費納付方法のお知らせ

平成26年度から、次のいずれかによる納付方法に変更いたしました。

コンビニ払込票は毎年6月の同窓会新聞に同封いたします。会費未納額がある方には、同窓会新聞を郵送の都度同封させていただきます。

1. 口座振替

・会員の指定する金融機関口座(ゆうちょ銀行を含む)から振替集金し、納付することができます。

・一度手続きをすると毎年納付する手間が省けてとても便利です。

なお、口座振替日は毎年7月23日です(金融機関が休業の場合、翌営業日)。

・手数料はかかりません。

・口座振替を希望する方は、同窓会事務局にお申し付けください。手続き用紙をお送りいたします。

2. コンビニで納付

・同窓会新聞に同封されたコンビニ払込票により、お近くのコンビニで納付してください。

・手数料はかかりません。

3. 同窓会の銀行口座へ振込

・北洋銀行、北海道銀行の同窓会口座に振り込むことができます。

・各銀行に備え付けの振り込み用紙をご利用ください。

・手数料はご自身で負担してください。

・同姓同名の混乱を避けるため、氏名の前に、必ず卒業期を記入してください。

【記入例】 50キ サトウ イチロウ

(1)北洋銀行 北七条支店

預金種目 普通預金

口座番号 4022794

口座名義 北海道大学医学部同窓会
連絡先 (011-706-5007)

(2)北海道銀行 札幌駅北口支店

預金種目 普通預金

口座番号 1214823

口座名義 北海道大学医学部同窓会
連絡先 (011-706-5007)

○会費未納者へのお知らせ

平成26年度から、2年を超える会費未納者には会員名簿及び同窓会誌の送付を停止することになりました。なお、該当する会員は毎年9月30日までに納入をお願いいたします。9月30日を過ぎますと会費納入状況確認手続きの都合により、会員名簿(会誌)をお届けすることができませんのでご了承ください。

同窓会新聞原稿の募集について

原稿および写真を下記の要領で募集いたしております。

(1)1面の写真

タイトルおよび写真説明文(170字以内)をメール等でお送りください。

(2)「各地区フラテ会」「エルムの仲間達へ」「海外で活躍する同窓生」「新世紀の医学に向けて」「会員のひろば」など本文1900字以内に顔写真1枚を添えてお送りください。

(3)「新刊書紹介」

本文600字以内、紹介文は本人以外

の同窓生をお願いいたします。

原稿あるいは同窓生をご推薦いただく場合は、5月号は2月15日まで、9月号は6月15日まで、1月号は9月15日までに、事務局宛にメール等でお送りください。掲載の可否につきましては、編集委員会にご一任ください。

なお、次回1月号の編集委員会はすでに終了いたしましたので、5月号に原稿の掲載をご希望でしたら、2月15日までに同窓会事務局までお送りくだ

さいますよう、お願いいたします。編集委員会以降にお送りいただいた原稿につきましては、次号までお待ちいただく場合もございますので、ご了承くださいますよう、お願いいたします。

〒060-8638

札幌市北区北15条西7丁目

北海道大学医学部同窓会事務局

TEL&FAX:(011)706-5007(直通)

E-mail:furate@med.hokudai.ac.jp

平成26年度 同窓会会員名簿 記載事項について

同窓会新聞5月号(148号)でもお知らせいたしましたが、本年度は名簿発刊の年に当たっております。会員名簿掲載用の住所変更届は、平成26年10月15日(水)同窓会事務局着分消印有効ではありませんをもちまして、締切とさせていただきます。

期日以降にご連絡をいただいた分に関しましては、印刷期間に合わない場合がございますので、ご了承くださいますよう、お願いいたします。

ドクター総合補償制度について

同窓会では、会員のための「ドクター総合補償制度」を創設し、随時募集を行っております。

現在、本制度には500名近くの会員

の皆様が加入しており、大変ご好評をいただいております。

医療事故は思いがけずに遭遇する可能性があり、そのためにも「医師賠償

責任保険」に加入していると安心です。

本補償制度は団体割引を適用しており、個人での契約に比べて割安な保険

料で加入することができます。

ドクター総合補償制度につきましては、同窓会事務局にお問い合わせください。

告知板

＜教授就任挨拶＞

旭川医科大学 外科学講座
心臓大血管外科学分野
紙谷 寛之 (73期)

平成26年3月14日付で、旭川医科大学外科学講座心臓大血管外科学分野の教授を拝命いたしました。私は平成9年に北海道大学を卒業し、同年金沢大学第一外科に入局いたしました。平成15年にドイツのハノーバー医科大学に留学し、平成18年に金沢大学に戻りましたが、同年ハイデルベルグ大学に就職することとなりました。その後、イエナ大学を経て、平成21年よりデュッセルドルフ大学にて勤務してまいりました。ご期待に添えることができるよう、志を高く持ち努力いたします。皆様のご指導、ご支援をどうぞよろしくお願いいたします。

＜学内・院内人事異動＞

＜辞職＞	平成26年9月30日	佐藤 直樹(51期)	手術部特任准教授 (新札幌聖陵ホスピタル院長)
＜任期満了＞	平成26年6月30日	青柳 武史(75期)	消化器外科学分野 I 特任研究助教 (聖マリア病院医長)
＜採用＞	平成26年7月1日	川久保和道(77期)	消化器内科学分野 (保健センター兼務) 助教
		松島 将士(会員2)	循環病態内科学分野助教
	平成26年8月1日	敦賀 陽介(75期)	消化器外科学分野 I 特任研究助教
		天野 虎次(76期)	高度先進医療支援センター助教
		山口 秀(79期)	核医学分野、核医学診療科特任助教
		間部 克裕(会員2)	がん予防内科学講座特任講師
	平成26年9月1日	氏家 英之(78期)	皮膚科助教
	平成26年10月1日	清水 伸一(71期)	放射線治療医学分野准教授
		西岡健太郎(81期)	放射線治療医学分野特任助教
＜昇任＞	平成26年7月1日	石森 直樹(69期)	卒後臨床研修センター准教授 (医学研究科助教)
		若狭 哲(75期)	循環器・呼吸器外科学分野講師 (同分野助教)
	平成26年10月1日	古川 洋志(67期)	形成外科学分野准教授 (同分野講師)
＜所属換＞	平成26年8月1日	松野 吉宏(59期)	病理診断科教授 (病理部教授)
		三橋 智子(64期)	病理診断科准教授 (病理部准教授)
		畑中佳奈子(77期)	病理診断科助教 (病理部助教)

北海道医学会からお知らせ

○機関誌「北海道医学雑誌 (毎年5月、11月発行)」の原稿募集

◆募集原稿

- ・「原著論文」「症例報告」「総説」「速報」「学位論文」「学位論文の要旨」「BAY (Best Articles of the Year)」「研究会抄録」「談話会抄録」等です。
- ・「教室だより」「海外だより」等、論文以外の投稿も歓迎します。

◆投稿資格

- ・投稿者は北海道医学会会員であることを原則とします。
 - ・入会方法、投稿規定、掲載料等は、北海道医学会事務局にお問い合わせください。
- 北海道医学会事務局
電話 011-706-5007
E-mail: digakkai@med.hokudai.ac.jp

○「北海道医学会研究奨励賞」の公募

◆応募資格等

- ・応募資格は、応募の年に発行された「北海道医学雑誌」に掲載された論文著者とし、共著の場合は筆頭著者とします。なお、応募する年度の末日において満40歳未満の本会会員とします。
- ・対象となる論文は、「原著論文」「学位論文」「BAY」とします。
- ・毎年12月に公募し、応募者の中から

選考します。詳細は北海道医学雑誌11月発行号でお知らせします。

◆受賞件数等

- ・医学の進歩に寄与すること顕著な研究であり、将来の発展を期待し得ると認められるものを、毎年3名以内とします。
- ・受賞者には賞状及び副賞3万円を授与し、北海道医学会総会の席上で表彰します。

フラテ101号発行のお知らせ

医学部フラテ編集部

同窓会新聞をご覧の皆様、いつも学友会誌フラテをご購読いただき、誠にありがとうございます。皆様の暖かいご支援により、今春発行の100号記念号も大変ご好評をいただきました。

さて我々フラテ編集部では今年度もフラテ発行に向けて準備を進めております。101号では新たな節目として、より読みやすく、より皆様に愛されるフラテを目指して参ります。具体的には、従来の企画の見直しに加え、誌面レイアウトの変更などを検討しております。どうぞご期待ください。

101号の発行は、来年2月下旬を予定しております。購読をご希望の方

は、同封の振込用紙にてお支払いをお願い致します。注文および支払方法を、郵便振込みによる前払いとさせていただきます。よろしくお願いいたします。

また、当編集部には100号以前の残部もございます。ご希望の方は、101号をお申し込みの際に、振込用紙にその旨をお書き添え下さい。別途、送らせていただきます。

なお、フラテの申し込みは9月と1月の2回受け付けております。

また、100号を申し込まれた方で、まだお手元に届いていない方もどうぞフラテ編集部までご一報ください。

＜101号の主な内容＞

- ・特集記事
- ・フラテ各地に行く＜福島編＞
- ・医療取材 ・教室便り
- ・学年紹介 ・新任教授のご紹介
- ・各講座新旧名称一覧 ・フラテ茶苑
- ・学生の広場 など

【フラテ茶苑 寄稿者募集】

学友会誌フラテでは、ご卒業の先生方のご寄稿をお待ちしております。学生時代の思い出や近況報告など、内容・字数に制限はございません。ご寄稿を希望される方は、フラテ編集部まで原稿をお送りください。原稿につきましては、どのような形式でも結構です。掲載を希望される写真や図などごさい

ましたら、併せてお送りください。また編集作業の都合上、原稿は10月末を目途にお送りいただきますようお願い申し上げます。沢山のご寄稿をお待ちしております。

※フラテ茶苑へのご寄稿の他、フラテ編集部へのご連絡・ご照会は下記宛にお寄せくださるよう、お願い申し上げます。

＜お問い合わせ先＞

フラテ編集部
〒060-8638 札幌市北区北15条西7
丁目北海道大学医学部内
TEL/FAX 011-736-1444(留守電あります)
E-mail:frate.med@gmail.com

新刊書紹介



「透析療法
パーフェクトガイド
第4版」
飯田 喜俊(28期)他編
医歯薬出版
¥4,320

飯田先生(28期)が本を改版された。それも第4版目である。初版が2007年であるから2-3年毎に改版していたことになる。在庫が無くなって初めて改版が行われることとなるため、医学生向けの教科書ならともかく領域が限られた医学書が版を重ねることは少ない。飯田先生の本は評判がよく売れているのだ。先日自分も透析アミロイドーシスについて触れる機会があり、本書を参考にさせていただいた。執筆者は本症とβ2ミクログロブリンの関連を世界で初めて見つけた下条文武新潟大学学長であった。という具合に各分野の第一人者が第一線で活躍している人が執筆している。大平整爾先生(38期) 上田峻弘先生(41期)が執筆されているのも嬉しい。

項目は医学、精神面も含めた看護、薬剤、社会福祉、医療機器と多岐に渡っており、治療にわたる問題ばかりではなく患者の日常生活を含めた総合的な医療が行えるよう構成されている。また、各項目最新の知識が簡潔に2ページ程度に纏められており、緊急時にもすぐ読めて対応できるよう配慮されている。項目の関連つけも行き届いており広く理解が深まる。サイドメモとして専門用語の解説やポイントやアドバイスも随時織り込まれ、初学者にもわかりやすく、臨床現場

ですぐ使えるよう工夫もされている。本当にパーフェクトガイドであり透析医療に関わるすべての人に一読を勧めたい。

編者には見識が求められ、すべての項目に目を通し時に不足分を補う指示や意見することが必要となる。その労力および時間的な負担は大変なものと思われされる。このような素晴らしい本を発刊され、進歩発展させる飯田先生の業績に敬意を払うとともに、このような先輩が同窓におられることを誇りに思う。

(53期 伊丹儀友)



「がんを「味方」にする
生き方」
小林 博(28期)
日本経済新聞出版社
¥918

おもしろい本である。著者と二人きりで談笑しながら、がんレクチャーに耳を傾ける、そういう親しみのある本でもある。読者は、がん細胞の生態や免疫学、がん化学療法の問題点、がん予防と健康教育の展望など、地域医療に大切な実践的知識を学ぶことができるだろう。

著者は、がん細胞の基礎研究に心血を注いだ学究。記念碑的業績のひとつが「がん細胞の異物化」(xenogenization)。1969年、この用語が論文として専門ジャーナルに世界に先駆けて掲載されたとき、さまざまな国のがん研究者が興味と共感あるいは賛辞をおくった。

「がん細胞の異物化」とはいったい、どのようなものか。本書で語られる内容を私流の言葉に翻案、紹介しておこう。

手術で摘出したがん組織を光学顕微鏡でのぞくと、がん細胞は見分けが付きやすい。出自の正常細胞にくらべ容

がん細胞は、免疫学的には狡知に長けている。出身母国での「がん帝国主義戦線」拡大のため、怪異な容貌をひたかくす。つまり、厳しい免疫監視網を潜り抜けようと化粧してしまうのだ。この化粧の皮を剥がし、異様な形相をそのまま白日の下にさらけ出す戦略が「がん細胞の異物化」ということになる。かくして「がん細胞」は、光学顕微鏡下でみせた、あの「異物」(ラテン語xeno)本来の異形の顔に戻されて免疫学の法廷に連行、裁きをうけることになる・・・というのが私の恣意的な解釈だ。

本書は、そのプロセスを分かりやすく説明、知的スリルにみち、く思考のレッスンに役立つ。

本書は、研究者の回顧録ではない。著者の志は「がん予防」をめざす。ここでも著者は、研究者としてのフロンティア精神と科学的探究の意欲、がんの基礎・臨床にわたる国際的な研究発表の場「札幌がんセミナー」を創設した組織統合力などを存分に発揮する。その詳細は、本書自身に語らせるに如くはない。読者は、著者が「がん細胞」をとおして得た生命観と人生観の広さと深さを知ることになる。題名の、がんを「味方」にする意味には、多義的文化的哲学的側面もある。この受け止め方もまた、読者に委ねたほうが適当と思う。

同窓・同学諸氏あるいは多くの市民にも薦めたい良書である。

(28期 方波見康雄)



「なにをどれだけ
食べたらいいか?」
柴田 博(41期)
ゴルフダイジェスト社
¥1,188

「新しい健康増進への道の起点になるか?」

けだし時を得た上梓ではある。この4月に日本人間ドック学会・健康保険組合連合から「あらたな検診検査の基準範囲」が公表されて以来、マスコミ報道も加わって、いわゆる健康診断の正常値に関する議論が盛んになったが、著者は長年の調査結果をもとに、以前からこの問題に警鐘をならしてきて、いまようやく広範な議論が始まろうとしている時の本書の上梓である。

読んでみて、最も大きな問題だと感じたのは、若い女性の粗食傾向である。その女性たちに育てられている幼児も当然ながら低栄養であるという。こんなことが続いて、将来、我が国が世界の中でも寿命の短い国になってしまったときに誰が責任を取るというのか。

これが健康政策の恐ろしさであり、著者はそれを知るがゆえに、敢然として戦いを挑むのであろう。舌鋒鋭く次々と従来の健康施策や健康に関するスローガンをまな板に乗せる様は鬼気迫るものがあり、著者の歳を考えると遺言のように聞こえなくもない。

それにしても、「健康のためなら死んでもいい」と思っている人たちを手玉にとって、結果がすぐ出ないことを良いことに、次々に繰り出される健康増進神話は何とかならないものかと思う。これでは高度な内容と言われる我が国の文化も泣こうというものではないか。本書が一老人のこんな嘆きを払拭する方向への起点の一つになってほしいと思う。

(41期 仙道富士郎)

ご逝去者 新聞148号発行以降、ご連絡いただいた方を掲載しております。

御逝去年月日	氏名	期	御逝去年月日	氏名	期
平成23年 9月5日	矢崎 孝	専旧7	6月25日	音羽 博次	16
平成24年 9月7日	稲場 昭徳	専新7	6月28日	石坂 眞男	専旧7
10月27日	小山内 永三	専新6	6月30日	飯田 秀利	専旧6
平成25年 7月21日	中畑 十四雄	専5	7月4日	田邊 巖	43
10月12日	柿木 寛	専旧7	7月7日	藤田 富二雄	27
11月21日	小川 恕人	21	7月10日	樋口 晶文	48
平成26年 2月2日	服部 薫	専旧7	7月11日	高野 宏一	専4
2月22日	卯月 省	28	7月22日	山口 康徳	専5
2月28日	井上 正	26	8月2日	千葉 孝司	30
3月5日	高橋 豊	30	8月3日	赤坂 稔	専4
3月15日	平田 保	29	8月7日	遠藤 祥吾	専4
5月5日	田原 良一	専新7	8月8日	麦倉 元	15
5月18日	岩崎 祐三	38	8月10日	河野 通史	51
5月29日	横田 旻	37	8月11日	柳沼 徹	57
5月30日	牧野 幹男	専旧7	8月12日	菊地 完	27
6月2日	鈴木 英世	23	8月29日	石丸 修	27
6月6日	宇野 文平	26	9月5日	尾崎 一郎	26
6月6日	勝俣 哲男	専新7	9月12日	漆崎 一朗	22
6月12日	平井 博	48	9月15日	樫丸 博幸	52
6月19日	神島 薫	51	9月21日	伊藤 昌孝	37
			9月22日	山岡 貢二	58
			9月27日	松井 克彦	40
			10月6日	小西 貴幸	55

一面の写真説明

「新しい動物実験施設」

有川 二郎(会員2)

附属動物実験施設の改修工事が平成26年5月に完了致しました。写真は改

修後の動物施設です。明るく近代的に生まれ変わった施設となり、今まで以上に医学研究科の教育・研究の発展に貢献できるようハード面だけでなく、ソフト面についても、より一層利用者のニーズに答えることが期待されています。

編集後記

今年の4月から北大医学部の同窓会に医学部の新入生が全員会員として加わった。ちなみに在校生の2年生から6年生は希望者は会員になれる。多くの他大学の医学部ではその昔から学生さんが入学時から同窓会に関わるが、我学部はよくもわるくもおおらかだったので大きな変更である。未来に向かって卒業生と在校生の関係をより緊密なものにしていく阻いだ。また本紙は在校生にはご父兄宛てで送付されるので、同窓会と父兄との架け橋ともな

る。そこで、同窓会新聞も編集会議にて本号から在校生の話題も取り入れるようにした。今回は学校祭での医学部生を中心企画の医学展についての記事を掲載させていただいた。

同窓会新聞編集委員会では、新聞の記事について卒業生、会員(2)の先生方、在校生、ご父兄など多くの方々のご意見をお伺いしたいと思います。事務局までどうぞお寄せ下さい。

(66期 田中伸哉)

同窓会新聞は142号からHP上でご覧いただけます。アドレスは次の通りです。

<http://www.med.hokudai.ac.jp/~alum-w/news/index.htm>

ご意見等ございましたら、事務局までご連絡くださいますよう、お願いいたします。

印刷所 大日本印刷(株)

〒065-0007 札幌市東区北7条東11丁目1番1号
代表 (011) 750-2205

■お詫びと訂正

同窓会新聞148号におきまして誤りがありました。

4ページ「平成26年4月入学者名簿(102名)」氏名「坂本想太」君と記載したのは、正しくは「坂本想太」君です。

5ページ「春の褒章、叙勲」4列4行目「転身赴任」と記載したのは、正しくは「単身赴任」です。

関係の皆様にお詫び申し上げ、訂正させていただきます。